

# 松友会報

発行所  
青森県立八戸東高等学校  
同窓会松友会  
〒031-0001 八戸市類家1-4-47  
八戸東高等学校内松友会事務局  
電話 0178(43)0262

## 令和5年度 同窓会総会

令和5年8月27日、八戸ランドホテルにおいて、八戸東高等学校同窓会松友会定時総会が多くの皆様のご理解とご支援により開催されました。

今回は、コロナ感染防止、予想を超える酷暑等諸事情を考慮し、直前迄検討を続け、例年とは異なる内輪での開催となりました。



開催にあたっては、役員会、代表幹事会、事務局等で話し合い、検討して計画を立て、実行するという形で準備を進めた。

このしたみちに たちて  
このしたみちに 耳す  
このしたみちに やすらぎ  
このしたみちに 時もなし

生徒会誌「樹下路」五号から見開きに掲載されていたこの文には、樹々

を想像する等、樹々を通して、想いが広がって行きます。色々な想いを書き連ねました。多くの想いの中で、より鮮明に浮かんでくるのは、桜の樹々、桜の花々だとやはり改めて強く思い至りました。



### 樹々に思うこと

同窓会 会長 茂木典子  
(高校18回生)

の葉のそよぎや爽やかな風までも届けてくれる、詩のような趣深さがあると思います。

八東の樹々を思い浮かべるとき、先ず浮かんでくるのは、長い歴史を誇る桜、そして、圧倒的な存在感があるのは、ひととき

と一瞬に味わっていたさよならの思いです。かたが、駐車場の道路際にあったおおきな橡の木、可愛い帽子を被った実を沢山落としていた橡は、次の木が育てられ

催されたことは、多くの方々のご理解とご協力のお陰であると、心から感謝している。

懇親会では、初めての試みとして、会食を、持ち帰り可能な懐石風弁当をテーブル席にセットする形にした。総会と懇親会の会場は、コロナ感染防止対策の一つとして、ホテル内で最も広いホールを選んだ。そのため、大きな会場図を作った。好きなお茶などを選べるコーナーを設ける等、小さな工夫を心がけた。

事務局では、次の総会に向けて、早目の準備を進めて行く予定である。



### 支部だより

#### 東京支部

支部長 谷内玲子  
(高校22回生)

令和5年5月21日第一ホテル両国におきまして、4年ぶりに松友会東京支部総会が開かれました。コロナ開けで感染の懸念もありまして、同窓生

のみの参加と致しました。不安な思いでいっぱいのお陰でしたが、久しぶりの集まりは素敵な笑顔の皆様が集い、三年のブランクなどどこにも感じさせないものでした。



会場には、富田美津子(高女29回生)さんの絵の展示、又懇親会では、北野隆志(高校4回生)さんの「校章について」のお話。参加して下さっていたオペラ歌手の上田誠司(高校52回生)さんに即興で三曲も歌っていただき、会場は一段と華やかな雰囲気となりました。全てを払拭する八東パワーを再確認する一日でした。

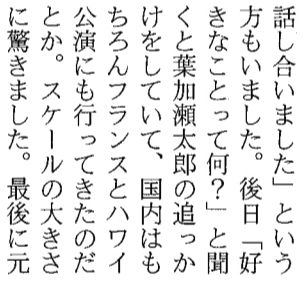
開催して良かった。このまま来年も又その次の年もと、思える貴重な時間を共有できました事に感謝いたします。

#### 八戸東高等学校 19回生ランチ会

幹事 高橋 美津枝

11月12日4年ぶりに八戸プラザホテルでランチ会を開催しました。初めに松友会東京支部総会と懇親会に出席した久保田さんからその時の様子を話して頂き、食事の後、出席者の皆さんから近況報告を頂きました。今日

から普通食となりましたので出席しましたとか、二泊の人間ドックを受けた翌日に心筋梗塞で倒れて、入院。お陰様で一年たち普通の生活にもどりました。と聞いてびっくり。また「夫婦で残りの人生お互いに好きなことをして生きて行こうと話しました」という方もいました。後日「好きなことって何？」と聞くと葉加瀬太郎の追っかけをしていて、国内はもろんフランスとハワイ公演にも行ってきたのだとか。スケールの大きさに驚きました。最後に元助産院院長から「私たち年代の過ごし方」を講義頂いた。「ほどほどにいい加減に暮らす」毎日ストックワットを年の数の分には「出来ない」とプーイング。現役で仕事をしている方も何人かいて、高齢者とは思えない若々しくおしゃべりな方ばかりでした。初めて参加者が二名、話は尽きず二次会でコーヒードrinkながら五時間もおしゃべりが続いた。「八東は楽しかった！」この言葉がとても印象に残りました。来年は東京支部の松友会総会にみんなで参加しようという提案があり、ぜひ私も参加したいと思っています。



平素より、茂木典子同窓会会長をはじめ同窓会員の皆様方からは、本校の教育活動に対し深いご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

令和二年一月から始まった新型コロナウイルス感染症による様々な制限は、学校現場にも大きな影響をもたらしました。昨年五月に感染症法上の類型が、五類に移行された事により、様々な制限は緩和されました。しかし、収束傾向にはありませんが、終息したわけではなく、引き続き、基本的感染対策は続いているところと見えます。



### 伊藤二子さんの ポストカード

八戸東高等学校 校長 清川 和幸



また、十月には青森県高等学校総合文化祭(三八・上北大会)が八戸市を中心に開催されました。本校は十二年に一度の事務局校でもあり、多くの生徒が活躍してくれました。

今年八月に、岐阜県で開催される全国高総文祭には、本校美術部生徒の出場が決まっています。話しは変わりますが、前任の五戸高校での出来事です。

学校に出入りしている伊吉書院さんに本を注文したところ、届いた本にはブックカバーが装着されていました。

色遣いがあり見たこともなく、ずっと眺めていたくなるような綺麗で不思議な絵でした。ブックカバーの裏には、制作者の伊藤二子さんの経歴が記されています。1926(2001)年、伊吉書院の創業者・伊藤吉太郎の孫として生まれ、造形家として活躍された事が記されています。

2019年1月没とありましたので、今から五年前に亡くなったことになりました。

当時は伊吉書院で購入した本なので、サービスで装着している程度にしか考えていませんでした。

令和四年四月に本校に赴任し、校内を一巡したところ、あのブックカバー

今回の寄贈には、茂木同窓会長の御尽力によるところが大きく、生徒・教職員一同感謝しております。同窓会の皆様ありがとうございました。

同窓会長の御尽力によるところが大きく、生徒・教職員一同感謝しております。同窓会の皆様ありがとうございました。

前号の会報では第六号の記事をアーカイブとして掲載しました。タイトルは特別企画・ラジオ同窓会『旧制八高女の思い出』です。1963年6月2日午前10時5分から30分間、RAB青森放送で送られたものです。三陸はるか沖地震の後、古い録音テープが偶然見つかり、RAB青森放送の許可をいただいて文章に起こし、平成14年の会報に掲載した懐かしい記事です。

大先輩方の語る思い出、60年前のラジオ放送を引き続き文字でお楽しみ下さい。

■参加者(肩書きは当時)  
大正十三号昭和二十八年の三十二年間東高に勤務した教諭 工藤千又先生  
公安委員橋本和吉夫人  
橋本田鶴さん(高女昭和三年卒)  
みまんデパート社長  
三浦萬喜さん(高女昭和八年卒)  
県教育委員 美濃部(旧姓宗)洋子さん(高女昭和九年卒)

美濃部 桜の満開の時の観覧会の運動会。  
三浦 あれは特別でございます。八中の生徒たちが、来たりなんかで、面白い話がありましたよ、あの頃。  
美濃部 寄宿舎の裏の門ですか、あそこからこっそり入ってきて、見るといって、本当に今の人と言ったらおかしな話ですけどもね、来る人も必死で。  
美濃部 あの頃の思い出という、競技でも、競争というよりも、みんなで楽しむことをやりましたね。走るよりも、むしろダンスとか遊戯とか団体のものを。随分楽しかったですね。工藤先生が教えてくださるダンスです。  
三浦 モダンなダンスですよ。  
美濃部 本当のダンスだったんですよ。  
三浦 タンバリン持つ

歳以上のおばあちゃんを私たちが案内役なんかしてね、手をひいてあげたりして。  
美濃部 音楽会が盛んなこともありましたよ。そういう時もお呼びしたりしたこともあります。あの音楽会はいつやったんでしょか。  
工藤 とにかく三田校長先生という方はいろんな行事をなさいましたね。美濃部 昔は豊かな行事がたくさんあったの。三浦 こないだも話しましたけど、皇后陛下の地久節、あの時年中行事でした。盛大な式典をやったほかに、私たちが学校だということでも音楽会をやりましたね。  
橋本 そうそう、丁度

美濃部 私の時は全部でした。だもんですから、コーラスという一応みんながやった覚えがあります。  
橋本 そうですね。  
美濃部 奥様方の時は専科？選択？  
橋本 いえいえ。  
工藤 東高になってからですね。  
美濃部 ああそうでございますか、やっぱり音楽はみんなやる方がいいような気がしますね。  
工藤 全校でコーラスやりましたことあったんじやありませんか。  
三浦 一年二年三年と分けまして、全体でやりましたよ。  
工藤 近藤先生の時で

美濃部 ああそうでございます。美濃部 本館にいらしたとき、外側をちょっと塗ったりなんかしてね。  
橋本 あれ、随分勾配があったんじゃないですか。  
三浦 特別教室だけが殆どでございましたよ。あの下が、後は上が教室でございましたね、裁縫室とか。  
美濃部 あれが今、ちょっと切れてね、後は跡形もなく、なくなりましたけど、あれだけ残っているんですよ。  
橋本 運動場は？  
美濃部 運動場は昔のままだよ。  
橋本 残っているの、ああそうなんですか。  
三浦 寮は更で全然無くなっちゃったんですよ。

三浦 それにこの頃は、学校に卒業生の先生方が大分いらっしゃるんですよ。  
美濃部 今は、田村先生さん、船場先生、吉田先生、高橋先生。  
三浦 三浦アサエ先生、美濃部 それから熊谷先生もいらっしゃるし、北山先生も。  
三浦 会議の時、お互いに自己紹介しましたよ。第何回の卒業か忘れていらっしゃる方もいるんですよ。ですけども、私たちの子供みたいな先生もいらっしゃるんですよ。こんな事言ったら失礼ですけど、年齢からいいますと誰が一番若いんでしょうか。  
工藤 私が十年前に辞めた卒業生が皆残っていますから。  
三浦 考えてみますと、丁度私の子供だとしてそのくらいの歳でいますものね、大きいのが、ですから、母校に帰ってきたら子供くらいの方もいらっしゃる。卒業回数が多い二十何回とか三十何回なんて言われると、なんだか他人事のように聞こえてきましたよ。私あの時随分自分では若いつもりなんでしたけど、丁度真ん中辺にいて、ぼかんと浮いているみたいな格好でした。  
美濃部 どちらかというところに近いというより、三浦 まだ七十何歳というおばあちゃんがいらいらしたもんですから、ですから私が丁度真ん中辺でしたのよ。  
美濃部 六十年で学校を建て替えているもんですから、記念式典もしないでいるらしいですね。新築のお祝いと六十周年のお祝いを一緒に盛大にやるのかというお話でございます。こないだ松友会の会長さんがおっしゃってました。そういう時にはまた色々なお話が出るでしょうから。  
橋本 なかなか学校に行くこと無いんですよ。美濃部 本館です。  
三浦 私はあそこ時々通ります。  
美濃部 ああそうですね。本館に面影は変わっても、伝統というものは随分しみとおっているもんですから。そういう、昔私たちが校歌も、式歌の思い出もありませんか、この頃またすっかり東高の歌って新しいんですよ。工藤 信時先生が作った校歌ですね。  
美濃部 今の信時先生のこの校歌。これも聞けば本館に今の子供たちにびったりでございますけど、ね。でもやっぱり昔の歌には昔の良さもございましてね。どうでしょう、幸い橋本さんがいらっしゃるから、思い出して、久し振りに懐かしい歌を歌ってみたい。校歌もあんなに楽しかった。あれは少し難しゅうございまして。うのは、一回生のおばあさまからきくと懐かしうていらっしゃるでしょうから、そういったしよ。

特別企画 ラジオ同窓会

『旧制八高女の思い出』

〔RAB青森放送 昭和三十八年六月一日放送〕



藤の花が咲く頃でした。美濃部 小幡先生という少しお太りになった声楽のね、ちょっと三浦環さんばりの先生がいらっしゃいました。橋本 先生、相原先生は御存知ですか。  
工藤 相原さんも知っています。  
橋本 相原先生でした。最初は、ああ、さようございませうか、だから随分盛大な音楽会なにかがあったことね。今でもやっていると聞いて、今もやっていますか、割と一部の人のものですね。昔はみんな楽しんでたようない気がします。

橋本 そうでしたね。美濃部 今回の卒業式でも色々な式歌を歌いますけど、今は数が少なくなりました。昔は随分たくさん歌っていました。なんというんでしょ、随分思い入れなんでしょうか、先生あれなんというんですか。  
橋本 あのね、万歳、万歳というのじゃないですか。  
美濃部 そうそう、祝歌、祝歌ね。  
工藤 二部か三部に分けてね。  
美濃部 すばらしいコーラスやったんですよ。  
工藤 八中からいらした校長先生が卒業式を見て、女学校のは感涙するといっていましたよ、本館に良かったと。

美濃部 お裁縫の時間という特別な、あの頃の娘として特別指導を受けていたものね。  
三浦 新しい教育方法だったんですよ。  
美濃部 私も実際に縫いはしませんが、しろと言われれば袴でもどうや、帯でもどうや、というものは、あの時の教育の賜物ね、そう思います。  
橋本 私も本館にありたいと思いますわ、どうにか縫えるんですよ。  
三浦 しばらくしつけないですよ、たまに縫いますと子供が、あらお母さん縫えるの、なんていうんですよ。  
美濃部 そう言われた時の誇らしい気持ちね。

三浦 それにこの頃は、学校に卒業生の先生方が大分いらっしゃるんですよ。  
美濃部 今は、田村先生さん、船場先生、吉田先生、高橋先生。  
三浦 三浦アサエ先生、美濃部 それから熊谷先生もいらっしゃるし、北山先生も。  
三浦 会議の時、お互いに自己紹介しましたよ。第何回の卒業か忘れていらっしゃる方もいるんですよ。ですけども、私たちの子供みたいな先生もいらっしゃるんですよ。こんな事言ったら失礼ですけど、年齢からいいますと誰が一番若いんでしょうか。  
工藤 私が十年前に辞めた卒業生が皆残っていますから。  
三浦 考えてみますと、丁度私の子供だとしてそのくらいの歳でいますものね、大きいのが、ですから、母校に帰ってきたら子供くらいの方もいらっしゃる。卒業回数が多い二十何回とか三十何回なんて言われると、なんだか他人事のように聞こえてきましたよ。私あの時随分自分では若いつもりなんでしたけど、丁度真ん中辺にいて、ぼかんと浮いているみたいな格好でした。  
美濃部 どちらかというところに近いというより、三浦 まだ七十何歳というおばあちゃんがいらいらしたもんですから、ですから私が丁度真ん中辺でしたのよ。  
美濃部 六十年で学校を建て替えているもんですから、記念式典もしないでいるらしいですね。新築のお祝いと六十周年のお祝いを一緒に盛大にやるのかというお話でございます。こないだ松友会の会長さんがおっしゃってました。そういう時にはまた色々なお話が出るでしょうから。  
橋本 なかなか学校に行くこと無いんですよ。美濃部 本館です。  
三浦 私はあそこ時々通ります。  
美濃部 ああそうですね。本館に面影は変わっても、伝統というものは随分しみとおっているもんですから。そういう、昔私たちが校歌も、式歌の思い出もありませんか、この頃またすっかり東高の歌って新しいんですよ。工藤 信時先生が作った校歌ですね。  
美濃部 今の信時先生のこの校歌。これも聞けば本館に今の子供たちにびったりでございますけど、ね。でもやっぱり昔の歌には昔の良さもございましてね。どうでしょう、幸い橋本さんがいらっしゃるから、思い出して、久し振りに懐かしい歌を歌ってみたい。校歌もあんなに楽しかった。あれは少し難しゅうございまして。うのは、一回生のおばあさまからきくと懐かしうていらっしゃるでしょうから、そういったしよ。



橋本 じゃあ、あまり調子が高いとなんですから、低めに。(松友会の歌一番を全員で斉唱) 「おわり」